

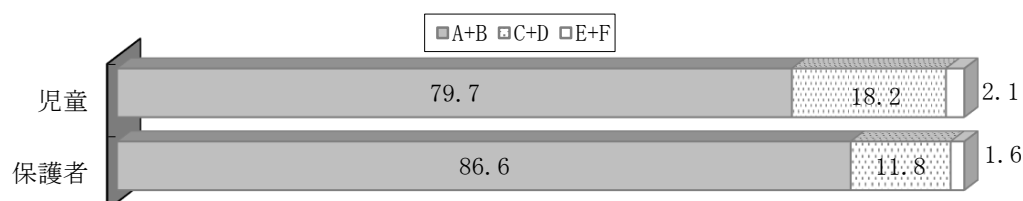
平成30年度 学校教育自己診断 小学校（共通項目）

1. 学校の生活について

児童 学校へ行くのが楽しい。

保護者 子どもは、学校へ行くのを楽しみにしている。

A:よくあてはまる B:ややあてはまる C:あまりあてはまらない D:まったくあてはまらない E:わからない F:無回答



〔分析〕

前年度比:児童-1.3%、保護者-0.1%

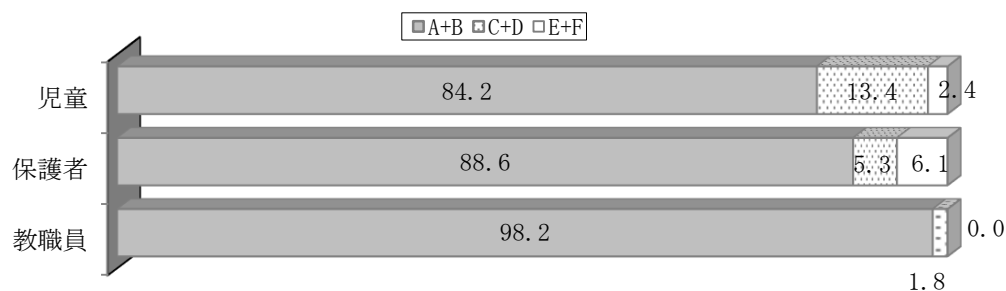
児童と保護者の肯定的な回答の割合が年々大きくなる傾向にあったが、今年度は80%前後のところではほぼ横ばいとなった。これは、各学校での学級力向上の取組が継続している成果と考えられる。今後も引き続き、すべての児童が安心して過ごせるよう、子ども自身がより主体的に活動できる授業づくり、また安心して居場所づくりに取り組むとともに、学校と保護者が連携し、児童をより深く理解することが求められる。

2. 「確かな学力」の育成について

児童 授業は、わかりやすい。

保護者 先生は、授業がわかりやすいように工夫しているようだ。

教職員 学校では、常にわかりやすい授業をめざして工夫改善を図っている。



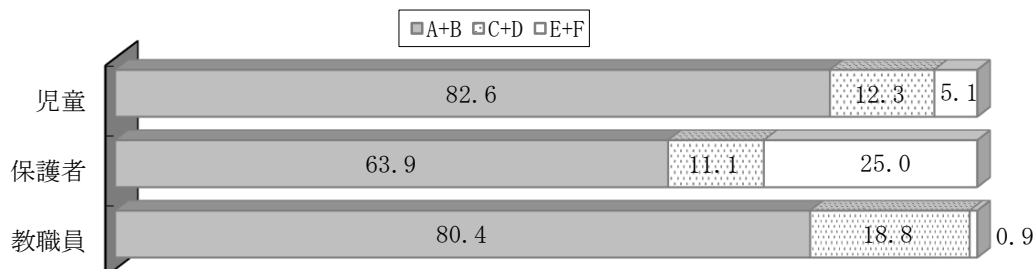
〔分析〕

前年度比:児童-3.4%、保護者+1.2%、教職員+0.1%

昨年度と比べると、A:よくあてはまると回答した児童が-2.5%となったが、全体の84.2%が肯定的な回答をしている。今後も、各学校における校内研究や研修による授業改善を日々実践し、引き続き児童の関心・意欲を高める授業をめざさなければならない。また、教職員の肯定的な回答と児童・保護者との回答結果にやや差があることから、児童の実態に合わせた授業改善を図る余地があると考えられる。今後も「開かれた学校」をめざし、教職員の意図する授業づくりの視点について、発信していくことも求められる。

3. ICTの活用について

児童 先生は、コンピュータやプロジェクターを使って授業している。
 保護者 学校は、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使ったわかりやすい授業を行っている。
 教職員 学校では、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使った授業づくりを推進している。



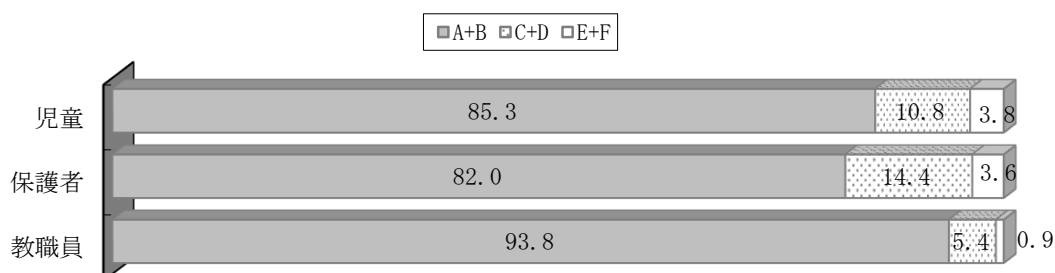
[分析]

前年度比: 前年度はアンケート項目なし

高度情報化社会の中で、主体的・対話的で深い学びを実現するために、今後の教育現場においてICTを活用した授業改善が求められる。町教育委員会としては、電子機器の環境整備を行うとともに、プログラミング教育に関する研修などを行い、引き続き授業力の向上に努めていきたい。

4. 学校の通知表について

児童 通知表の内容は、納得できる。
 保護者 通知表は、よくわかる。
 教職員 学校の通知表は、児童・保護者にわかりやすく、適切な評価が行われている。



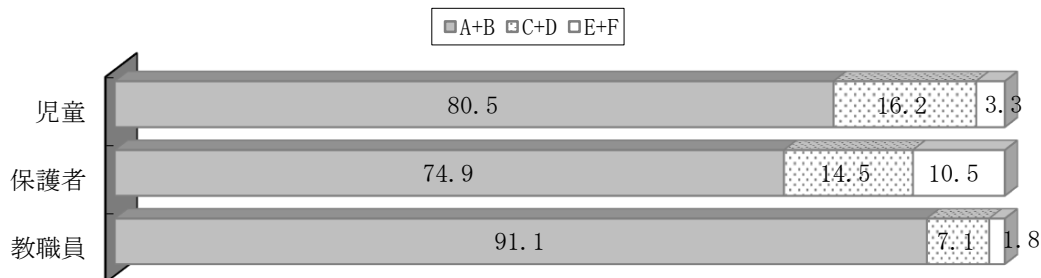
[分析]

前年度比: 児童-4.4%、保護者+1.9%、教職員+2.1%

児童の肯定的回答は、昨年度より-4.4%となったが、85.3%と高水準を維持している。これは、教職員が評価を見据えた授業づくりの観点を導入し、日々実践している成果と考えられる。通知表の評価については、平成32年度から実施される新学習指導要領に対応すべく、児童自身が学習の成果と課題を見つめなおすきっかけとなるよう、また保護者に対しては学校への信頼や協力を得る手がかりとしての機能となるよう、妥当性・信頼性を高められるように、移行期間を活用して準備する必要がある。

5. 家庭学習について

- 児童 家では、自ら進んで学習(宿題、予習・復習、自主学習など)している。
 保護者 学校は、家庭学習の習慣がつくよう取組を行っている。
 教職員 学校では、家庭学習の充実に向けて、家庭と連携するなど、重点的に行っている。



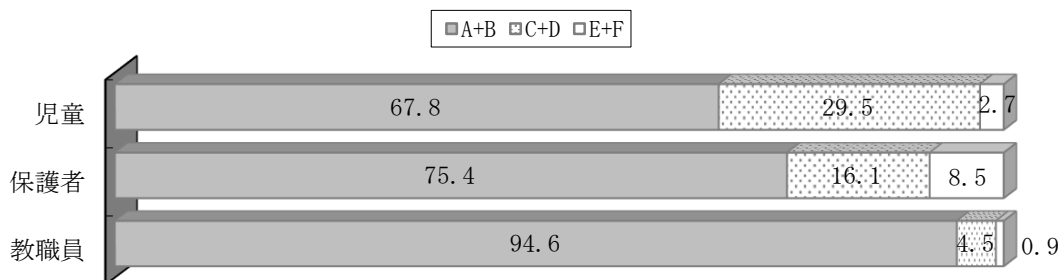
[分析]

前年度比:児童+4.9%、保護者-3.8%、教職員+2.2%

予習に視点をあてた宿題や学校支援地域本部の放課後学習支援の成果もあり、児童の肯定的な回答の割合が高くなっていると考えられる。保護者の肯定的な回答の割合が低くなっている点に関しては、学校の取組を家庭に確実に発信し、家庭学習に関する連携をより一層深めていくことが重要である。教職員と児童・保護者の意識の差を小さくする取組や工夫も必要である。

6. 読書習慣について

- 児童 読書をよくする。(マンガ以外の)
 保護者 学校は、子どもに読書の習慣がつくよう指導してくれている。
 教職員 学校では、子どもの読書習慣の定着に向けた取組を、重点的に行っている。



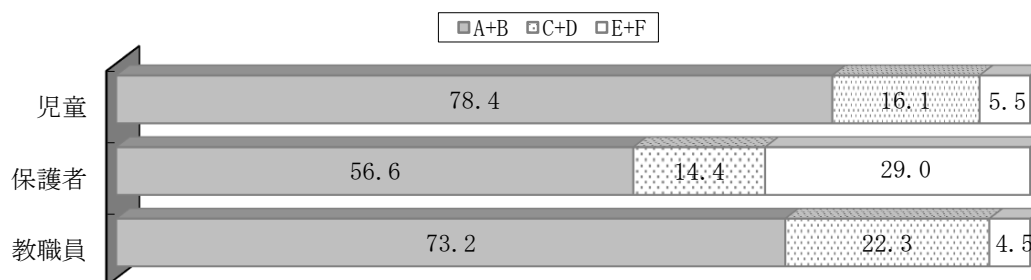
[分析]

前年度比:児童+3.0%、保護者-3.1%、教職員+3.9%

読書に関して肯定的な回答の割合が高いのは、昨年度より各学校に1名の学校図書館専任職員を配置した効果が表れていると考えられる。学校図書館専任職員と授業を行う教職員とが連携することで、これまで以上に授業での活用効果が期待される。町をあげて読書活動に力を入れていることを、地域や保護者にも積極的に発信していくことが必要である。今後も継続して、読書指導につながる授業づくり、家庭読書の推進等の取組を充実させていくことが求められる。

7. キャリア教育について

児童 学校では、自分らしく生きることや、将来について考える機会がある。
 保護者 学校は、学年に応じて、子どもが生き方や将来について、考えられるような指導(キャリア教育)を行っている。
 教職員 学校では、児童が自己の生き方を見つけられるよう、各学年に応じた系統的なキャリア教育を行っている。



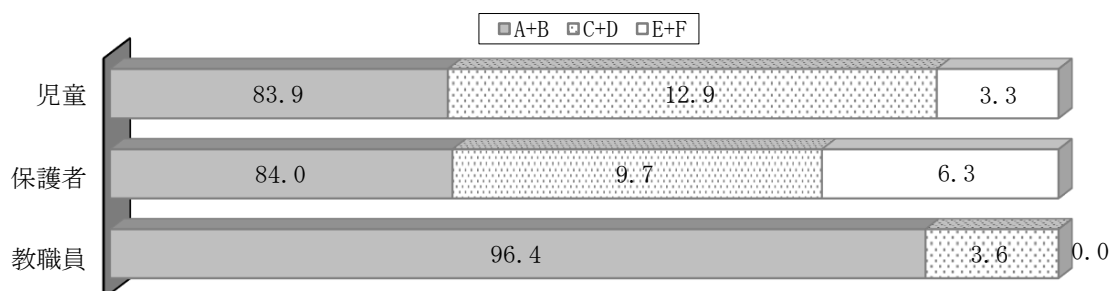
[分析]

前年度比:児童+6.2%、保護者-0.2%、教職員-4.6%

総合学習や道徳等、自分らしく生きることについて考える取組の成果が表れていると考えられる。教職員に関しても、キャリア教育に対する意識を、児童自身の自己肯定感や自尊感情の醸成に重点を置き、あらゆる教育場面において展開しないとけない。児童が主体的に自己実現に向かって将来を描く力の土台を形成していくことが、保護者への発信にもつながると考えられる。

8. 「心の教育」や規範意識の育成について

児童 学校は、人に対する思いやりやルールの大切さについて教えてくれる。
 保護者 子どもは、人権の大切さや社会のルールについて、わかっていると思う。
 教職員 学校は、人権の大切さや社会のルールについて、身につけるよう指導している。



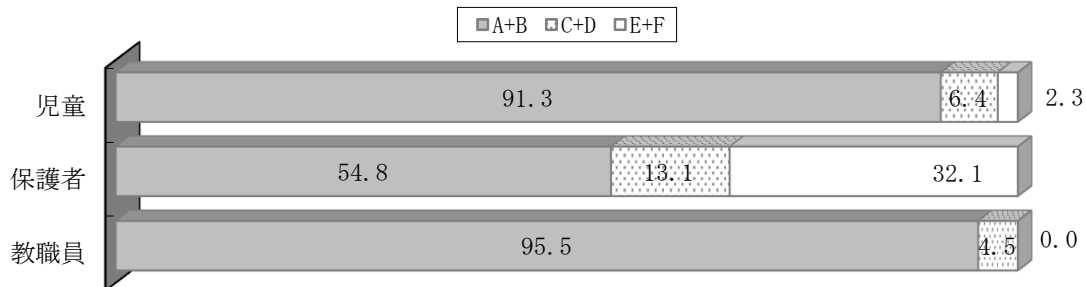
[分析]

前年度比:児童-4.6%、保護者+1.6%、教職員+2.9%

児童の肯定的な回答の割合が低下したものの、全体としては高水準を維持しているといえる。これは、日々の教職員の小さな努力の積み重ねの成果と考えられる。小学校においては、引き続き学級づくりを柱に規範意識を醸成すると同時に、特別の教科道徳を要として、豊かな人間性を育む授業改善等が求められる。

9. いじめ防止・対応について

- 児童 学校は、「いじめをしてはいけない」と教えてくれる。
 保護者 学校は、いじめ防止や早期発見の取組を推進している。
 教職員 学校は、いじめ防止や早期発見の取組を、組織的に行っている。



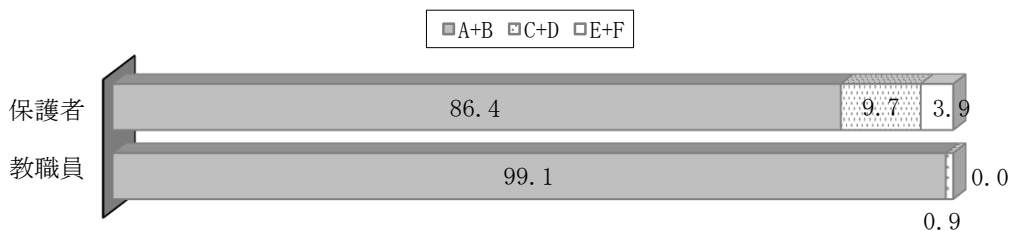
〔分析〕

前年度比: 児童-0.7%、保護者+1.4%、教職員+0.1%

昨年度同様、高い水準を維持している。学校がいじめに対する毅然とした姿勢や取組内容をより一層積極的に発言し、地域・保護者とも連携した「いじめを許さない」という意識を今後も共有していきたい。今後もいじめ防止に大きな効果がある「より良い集団づくり」を推進していきたい。

10. 保護者や地域との連携について

- 保護者 学校は、保護者や地域の人たちに授業を公開し、つながりを深める機会を多く設けている。
 教職員 学校は、様々な学校教育活動に対し、保護者や地域の方々の協力や連携が図られるよう努めている。



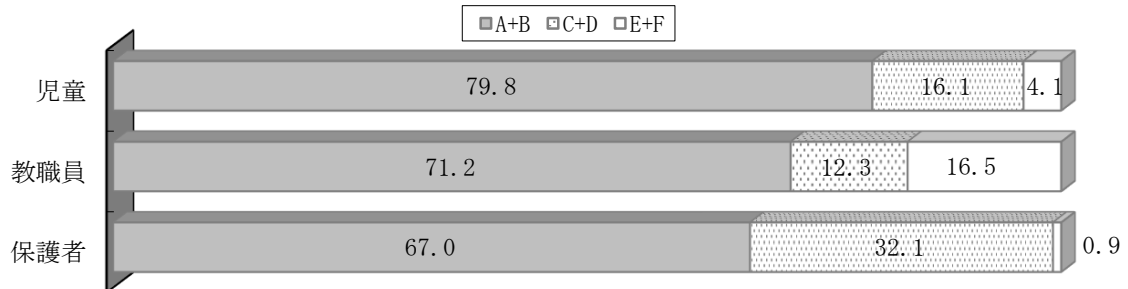
〔分析〕

前年度比: 保護者-5.7%、教職員+4.7%

保護者の肯定的な回答の割合が減少したものの、全体としては高い水準を維持している。今後も継続して、保護者や地域へ教育活動について積極的に発信することで「開かれた学校」をめざし、家庭や地域社会とともに子どもたちを育てていく視点にたった学校運営を行うことが求められる。

11. 「食の教育」について

児童 学校では、「食」の大切さについて、考える機会がある。
 保護者 学校では、「食育」についての取組を推進している。
 教職員 学校では、「食育」についての取組を組織的に行っている。



〔分析〕

前年度比：前年度はアンケート項目なし

学校給食や家庭科、社会科の時間を中心に、「食」の大切さや「命」の大切さ、そして地産地消の重要性などについて学ぶ機会を多くつくりたい。保護者には、献立等を通して学校における「食育」を発信し、教職員に対しても給食の時間を教育の場と捉えるよう促していきたい。